

第5章 整備方針

1 整備テーマ

(1) 整備テーマの設定

井路とともにある暮らし 石の上にも90000年のまち

上記の整備テーマは、本重要文化的景観が形成されるに至ったこれまでの経過をひとことで表した言葉である。私たちは今なお、約9万年前の阿蘇火山の巨大噴火から流れ込んできた火砕流が冷えて固まった溶結凝灰岩を見ることができ、かつ、足下にも広がっている。私たちの生活はこの溶結凝灰岩の上で成り立っており、磨崖仏や石橋、石風呂といった石造文化も溶結凝灰岩があったからこそ築かれたと言っても過言ではない。

また、緒方川兩岸の河岸段丘面に広がる水田や丘陵地に沿ってある棚田は、人々の生活を支える生業としての農業を発展させたが、それを可能としたのが井路である。緒方川やその支流河川によって溶結凝灰岩は侵食され、川面との高低差が生じた河岸段丘面や丘陵地上に先人は、その高低差を埋めるために、上流より水を引くための井路を開削した。こうして生まれたのが、河川を底地として、丘陵地に向かって田、道路、井路、集落と連なる土地利用であり、井路が作りだした風景とともに私たちは生活している。

そして、現在を生きる私たちにとっては、約9万年前から長い時間をかけて今なお存在し、居住空間に制限を与えられながら井路の開削、水田の開発を優先した先人たちの行為があって当たり前風景が築かれたのである。この風景が「素晴らしいもの」「自慢できるもの」と気づくことができた私たちが、先人の思いを受け継ぎ、これからの未来へ継承していくために本重要文化的景観の整備テーマを設定し、取組を推進していく。

(2) 整備テーマの背景

本重要文化的景観を保存し、活用すべく整備を進めるにあたり、本市が抱えていた負のイメージを払拭したい。まず大分県と言えば別府や湯布院を代表とする温泉を思い浮かべる人が多いのではなかろうか？ 実際、県を挙げて「おんせん県おおいた」をPRし、知名度の向上を図ってきた。しかしながら、本市には温泉がない。隣接する周辺自治体全てに温泉があるというのである。このことは、市民の意識にまるでかさぶたのように残り、自分の住むところには「何もない」という思いが強かった。しかも残念なことに、この思いは代々受け継がれているかのごとく、老若男女が口にしていた。

こうした中、本市では合併後、一体感の醸成をすべく、自然遺産や歴史文化遺産にスポットを当てた結果、日本ジオパークとして認定された「おおいた豊後大野ジオパーク」や世界ユネスコエコパークとして選定された「祖母・傾・大崩ユネスコエコパーク」という大きな成果を得ることができた。また、古くから石風呂入浴という現代のサウナに通じる文化があったこと

から、温泉がないことを逆に「サウナのまち」を宣言し、現在に至る。こうした取組から少しずつではあるが、私たちが住むまちには素晴らしいもの、自慢できるものがたくさんあるという意識が根付いてきた。

そこで、改めて本重要文化的景観に目を向けると、普段何気なく見ている風景や当たり前のようにそこにあるものが、実は全国的に見ても素晴らしいものであるということが認められたことに着目したい。私たちは生活する上で、当たり前のように凝灰岩の岩壁や石造物を目にし、家の前には井路が通り、緩やかな水の流れを目にしている。もちろんそこには何の感情もない。当たり前すぎるからである。このような背景を前提として、整備テーマを設定した。

2 地域住民及び来訪者に向けた計画にするための目標

(1) 地域住民に向けた計画にするための目標

- 「緒方川と緒方盆地の農村景観」の本質的価値への理解を深める
- 地域への誇り・愛着を高める
- 地域の生業の持続性を維持、向上させる

(2) 来訪者に向けた計画にするための目標

- 「緒方川と緒方盆地の農村景観」の美しい風景、地域固有の食、そこで暮らす人が魅力となり、何度も訪れたいくなる場となる
- 「緒方川と緒方盆地の農村景観」の本質的価値への理解と感動が得られる
- 「緒方川と緒方盆地の農村景観」が、また来たい、住んでみたい場所となる

3 整備を実施する際の考え方

(1) 本重要文化的景観選定範囲全体での取組と重点エリアでの取組を並行して実施する

選定範囲全体に関わる内容である取組と5つの重点エリア（エリアの選定については第6章第2節を参照）ごとに行う取組を並行して実施する。特に重点エリアで行う取組は、選定範囲全体に波及させる意味合いもあることから、優先的に取組を進めていく。

なお、具体的な進め方については、第6章以降に記述する。

(2) 長期的に取組む事業とフットワーク軽く取組むパイロットプロジェクトを並行して進める

本計画は2025年度（令和7年度）から2029年度（令和11年度）までの5カ年計画であるが、計画期間内で事業を終えることができるもの、長期的な取組の先鞭をつけるものなど、事業の内容によって、その緊急度、難易度が異なる。

例えば、「農地の持続的な維持、向上」は、本重要文化的景観の基礎となる農村風景にとって不可欠のものである。ただし、アンケートにおいても後継者が確保できている割合は12%程度と状況は極めて厳しい。社会教育課だけでは、課題解決に向けては限界があり、農政部局などと連携した取組が不可欠である。当面5カ年では、豊後大野市役所内の横断的な協議の場の構築、農業従事者への支援メニューの拡充など、必要なことを洗い出したうえで、長期的な視点で打てる手だてから実施していく必要がある。

一方で、ワークショップの参加者などからも、「できることから、それを楽しみながら、とりあえずやりはじめよう」との声も上がっている。

ワークショップの参加者などを中心に、有志の実践メンバーを組織化し、「緒方川と緒方盆地の農村景観」保存活用協議会の活動部会等と位置づけ、パイロットプロジェクト等の早期実施を図る。

本重要文化的景観は選定範囲面積が広大であるので、複数のエリアに区分し、エリアごとのパイロットプロジェクトを並行して実践していくことで、ワークショップでの小さな灯りを小松明火祭りで緒方盆地一面に広がる炎のように大きな灯りに広げていきたい。



ワークショップで原尻の滝周辺を見て回る参加者

(3) 民間の活力を活かしながら事業展開を図る

本重要文化的景観の整備を効果的に進めていくためには、地元住民、民間事業者との協働での取組が不可欠である。

国が示す文化的景観保護推進事業の補助メニューにもあるような、標識、説明板等の整備、便益管理施設の設置、重要な構成要素の復旧、修景等については、行政が主体的に取り組んでいく。

一方、特徴ある土地利用の農地保全、地域コミュニティの維持、関係人口、交流人口の確保等、新たな民間の担い手を育成し、行政が民間の伴走者となったり、民間が活躍できる土台づくりの役割を担いながら進めていく必要がある。

(4) 地元の担い手不足を関係人口で補いながら事業実施を図る

かつては地区ごとに、地元を力強く引っ張るリーダーが存在し、地区の寄り合いや行事を通じて地域の担い手を育てながら地域を維持していた。現在、そのリーダーたちも高齢化が進行し、地元地域活力は弱体化している。現在も、緒方に生まれ緒方で育ち、緒方をなんとか盛り上げようとする若手(40~50代)は存在するが、その両肩にかかる負担は年々増すばかりである。

一方、緒方に魅力を感じ、移住してくる若い世代も一定数であるが存在し、新たな地域の活力の小さな源となっている。国の重要文化的景観に選定されたことを契機として、この流れを加速させ、新たな担い手となる関係人口を確保していく。特に関係人口の増加につなげる取組については、本重要文化的景観選定範囲内に設置している cocomio と連携し取組を推進する。



豊後大野市関係人口交流拠点施設 cocomio (ココミオ)